

## 劉心武会見記

渡邊 晴夫

### 1 はじめに——会見まで

1997年8月新時期文学中日学者対話会に参加した時、会えれば会いたいと思っていた作家の一人が劉心武だった。会終了後の24日の朝、白燁氏から聞いていた電話のダイヤルをまわした。はじめにでたのはご子息であろうか、声が若かった。少ししてややくぐもった感じの「もしもし」という声が聞こえた。「わたしが劉心武ですが、どなたですか」という。名前と身分を名のり、以前にあなたの初期の作品について論文を書いたことがあるというような自己紹介をして、シンポジウムで北京に来ていま滞在中であるとは言ったものの、お訪ねしたいときりだすことができなかった。「お忙しいでしょう」などと、埒もないことを聞き、「比較忙」と言われ、二の句がつけない。作家に暇があるわけではないので、まさに愚問だった。しかたなく日本に帰ってから論文等を送りたいがというと、9月16日から30日まで夫人と日本に行く予定だという。日本でお目にかかることができるかと尋ね、快諾を得た。国際交流基金の招待で行くので、日程は日本に帰ってから確かめてくれとのことだった。そのあとで「いまどこに泊まっているのか」、「いつまで中国にいるのか」というようなことを聞かれた。その口調にはつごうがいたら会ってもよいという気持ちがあるように感じられた。へんに遠慮をしないで率直に会いたいと言うべきだったと思いながら電話をきった。

帰国後、10数年前に書いた小論「劉心武の初期の作品について」(『駒澤大学外国語部論集』第15号)の抜き刷りとテキスト『中国の短い小説』(朝日出版社、劉心武「新豆汁記」などを収録)を送った。

9月に入って国際交流基金とコンタクトをとった。北京の事務所の推薦で招待することを決めたが、劉心武という作家について必ずしも十分な情報をもってはいないようであった。長篇小説『鐘鼓楼』、児童文学『我是你的朋友』、それに徳間書店の現代中国文学選集の一卷が劉心武に当てられていること、また以前に一度来日していることなどは知っていたが、日本の研究者はこの作家をどう評価しているのか、端的に言えばどのくらいのレベルの作家と考えられているのかを知りたいようであった。かなりの数の紹介や論文が書かれているが、大学の紀要や専門の雑誌等に乗ったものが多いので、すぐには入手し難いだろうということ、私の書いたものでも読ませてほしいとのことだった。六・四の直後まで『人民文学』の主編であったことを

考えて、とりあえず「日本で言えば芥川賞の選考委員クラスの、それもかなりヴェテランの作家と言ってよいでしょう」というあまり適切とは言えない譬えでこの作家の説明にかえ、小論(前出)と『鐘鼓楼』を紹介した短文(『東方』66号1986年9月)を送った。折り返し国際交流基金からは礼状と前回1981年に文藝春秋社の招待で来日したあと劉心武が発表した「中国作家の見た「初めての日本」」(『文藝春秋』1981年7月号所載)のコピーが送られてきた。こうしたやりとりのなかで劉心武本人の希望をもとに作られた日程に9月29日の國學院大學への訪問も組みこまれたのである。

9月16日日本に着くとすぐその夕刻日本ペンクラブの例会に出席し、日中の作家の交流などについて懇談したとのことである。東京で数日過ごす間に『鐘鼓楼』と『我是你的朋友』の翻訳を出している恒文社とベネッセコーポレーション、それに文藝春秋社、早稲田大学等を訪問し、自作についての読者、批評家などからの反響を聞いたり、研究者と懇談したりしている。また特に希望して歌舞伎を見ている。そのあと札幌に飛んで農場と牧場を訪問、農家の人に熱心に質問したと聞いている。これまで日本を訪れた中国の作家は東京を中心に都市のことしか書いていないが、自分は農村に関心があり、北海道で農家を訪ね将来の執筆に反映させたい、とのことだったようである。つぎに関西へ飛び、研究者と懇談し、また京都大学を訪問、そこでも先生方と懇談している。広島をまわって東京にもどり、2日ほど観光にあてている。27日朝宿泊中のホテルに電話をして、29日の来校を確認した。

## 2 会見のあらまし

9月29日午後2時半過ぎ、授業を終わって中国文学科の資料室にもどると、劉心武氏は通訳、国際交流基金の付添いの人とともにすでに来着されていた。電話でお話したことはあっても、お目にかかるのは初めてである。ご挨拶すると、にっこりと微笑んで「下課了嗎？」と問いかけてきた。氏が十数年教師をされていたことを思いだした。研究室にご案内して、用意しておいた國學院の学校紹介の冊子、昨年私が編集を担当した『國學院雑誌』中國學特集(第九十七卷第十一号)などをさしあげ、問われるままに「國學」という言葉の意味などを話しあっているところへ、中国語の大川完三郎教授が加わる。中国文学科学科代表で唐代文学が専門の赤井益久教授にも加わってもらう。数日前から現代文学の研究者の何人かの方に劉氏が来訪される旨ご案内をさしあげてあったが、残念ながら他大学からの参加はなく、三人で劉心武氏を独占する贅沢な懇談になった。

大川、赤井の両氏がそれぞれ名刺をだして、自分の専門の分野などについて自己紹介をしたあと、私が赤井教授を「こちらは中国文学科の主任です」と言いそえると、

大川さんがすかさず「不是班主任、是系主任」と、氏の出世作の題名にかけた冗談を口にした。劉心武氏も破顔一笑、なごやかな滑りだしとなった。

懇談は私たちが尋ね、劉氏が答えるという形で進行した。話題は「新豆汁記」に出てくる豆汁や北京の小吃、作家孫犁とその作品、小小説、劉氏の好む中国の古典文学、現代文学の作家と作品、日本の現代文学などについてであった。主に私が質問したため、話題が私の個人的な関心の範囲に限られてしまった。印象的だったのは、初対面であるにもかかわらず劉氏が終始率直に忌憚なく語りつづけたことである。にこやかで落ちついた表情には、1987年の“舌苔事件”での『人民文学』主編の停職と復職、ひきつづいて89年の六・四の後の主編解任という試練を経てきた作家の自信が感じられた。1994年に台湾の『中国時報』に招かれて訪れたという話を聞いて、台湾に行くことは政治的に問題はないのかと尋ねると、「問題はない、とくに90年代に入ってからはずいぶん短く答えたのが印象に残った。また、こちらの質問に対して、「日本では現代とはいつからをいうのか、明治維新以後か」というように問い返して質問の範囲を確かめてから答えていたのも、いかにもこの作家らしいと感じた。あっという間に時間が過ぎた。記念の写真を撮ることになり、まん中の席を譲りあって押し出した劉心武氏の肩はがっしりとしていて厚みがあった。ふと「班主任」の張俊石は作家本人だなという感じがした。

劉心武氏から私におみやげということで中国当代作家選集叢書『劉心武』（人民文学出版社、1996年）と当代世相十万言『相对一笑』（中共中央党校出版社、1994年）をいただいた。後者には「あなたは小小説に関心をもっているようなので」というコメントがついていた。開いてみると、序文に“千字文”とあるではないか。劉心武文集にはかなりの数の小小説が収められていることから所謂著名作家の中では劉心武がいちばん多く微型小説を書いているのではないかと考えていたが、彼に小小説の個人専集があったとは迂闊にも知らないでいた。ほかに刺繍をした布製の状差しもいただいた。皆さんに、ということで氏の友人の写真家徐勇氏の撮った写真の絵葉書「黄土深処」「水郷生活風景」「藏族風情録」の三組をいただいた。素晴らしい写真で、それをめぐってひとしきり話がはずんだ。徐勇氏には『胡同九十九』（北京出版社、1996年）という北京の胡同の写真99枚と99人の作家、評論家の胡同にちなむ文章を見開き2ページに収めたりっばな写真集がある。大川さん所蔵のその写真集に収められている胡同のモノクロは沈んだ美しさを湛えている。いただいた絵葉書の方はカラーだが、色彩と光のコントラストが美しい。素晴らしいおみやげをいただいたのに、お返しが貧弱で恥ずかしかったが、「新豆汁記」を精読した小論（『中国語』1992年5月号）、『鐘鼓楼』を紹介した短文（『東方』66号、前出）、「大猩猩」の翻訳

(『短篇・掌篇の世界』39号、1993年8月)、それに日本のお煎餅をさしあげた。通訳の女性が「これは日本の煎餅です。中国のとは違って、お菓子の一種です」と説明してくれた。4時、劉心武氏は「我告辞了!」と言って立ちあがった。

### 3 懇談の内容について

「新豆汁記」、豆汁などをめぐって——「新豆汁記」を中国語の授業で教えるために豆汁の味を知らなくてはと考えると、3月に北京に行ったとき豆汁を飲んでみた、という話を大川さんがした。豆汁は“酸苦”で飲みにくいのではないかと心配する劉氏に、「いや、私は飲みにくいとは思わなかった」と大川さんが答え、「あれは焦圈や火烧などを食べながら飲むものだ」というような豆汁、北京小吃についてのやりとりが交わされた。「新豆汁記」はどのくらいのレベルの学生が学ぶのか、京劇の演目が話のポイントになっているので二年生には難しいのではないかと、この作品を読んだ学生の反応はどうか、という劉氏の質問に、大川さんは「テキストには詳しい説明がついているから、中国語を一年間学んだだけの学生にも十分理解できる」「学生はおもしろく読んだようだ」と答えていた。

孫犁とその作品について——夏に北京で発表した孫犁「芸齋小説」にかかわる小論を進呈してあったのと、孫犁と劉心武の往復書簡を読んだことが頭にあったので、孫犁との交流の状況と「芸齋小説」についてどう思うかを尋ねた。孫犁は病気のため近年は会合などにはほとんど出てこないし、特別な交流はないとのことだった。孫犁はすぐれた作家だが、文壇の主流ではなく、辺縁にいる作家である、というような指摘もあった。「芸齋小説」の中には何篇か好きな作品があり、たいへんすぐれていると思うが、なかには必ずしもよいとは言えない作品もあるという。「芸齋小説」は初期の「荷花淀」と比べると、文体の文言化が顕著であると、私が指摘したことから、「荷花淀」は名作で、中学の語文の教材になっていることなどが話題になった。孫犁は戦争を題材にするときも、戦争のもつ残酷な面を正面から描くことはせず、美しい面だけを描く作家である。主流は戦争の残酷さを描くことを避けなが、と言って笑みを浮かべた。劉心武は「我的文学辺縁化」(『辺縁有光』漢語大詞典出版社、1996年)という文でさまざまな文学の潮流が生起するなかで自分の作品が注目を集めなくなっている状況を述べ、しかし自分には一貫した文学の理想がある、と語っている。彼が孫犁を主流ではなく辺縁にある作家だという時、辺縁という言葉にマイナスの価値評価が含まれていないことは明らかである。孫犁の作品では中篇小説「鉄木前伝」がいちばん好きであり、長篇小説『風雲初記』も大好きな作品であるということだった。

小小説、一句話小説について——所謂著名作家の中に微型小説に関心をもち、この形式の作品を書いている人は少なくない。王蒙、汪曾祺、林斤瀾、蔣子龍、馮驥才などは作品をかなりの数書いているだけでなく、小小説論も書いている。劉心武もその一人で、彼の文集には計44篇の小小説とほかに「人生一辞」と題する一句話小説(ワンセンテンスからなる最短の小説、短いものは2行30字、長くても10行270字くらいまで)94篇が収められている。今回いただいた『相對一笑』には文集に収められていない小小説が33篇収録されており、一句話小説も3篇増えて97篇になっている。小小説の“専業主”とよばれる人たち以外にこれだけの数の小小説を書いている作家はいないと思われる。因みに王蒙の書いた小小説は50篇余りである。著名な作家の中ではあなたがいちばん多く書いているのではないかという私の問いかけには頷いていたが、このジャンル自体はさほど重視しているわけではない、とのことだった。一句話小説については自負があるようで、先年台湾に行ったとき『中国時報』副刊の編集者も劉心武のほかにこういう試みをする人はいないと驚いていた、と笑った。台湾に行くこと自体に問題はないと語ったことは、前のところで触れた。あとで台湾に出かけた際の状況を『劉心武海外遊記』(華文出版社、1995年)所収の文章で知った。1950年代のおわり頃に劉心武の書いた小小説や散文が『北京晚報』などに散見される。文集にも59年に書いた小小説が3篇収められている。その文学的生涯の出発点が小小説のような短いものだったため、いわばなじんだ形式で作品を書きつづけているのであろうか。作風から考えると彼はどちらかと言えば短いものより長篇に向いているのではないかと思われる。劉心武の小小説についてはあらためてとりあげたいと考えている。

中国の古典と現代文学について——『秦可卿之死』(華藝出版社、1994年)という専著もあるので、予想していたことだったが、古典文学でいちばん好きな作品は、と訊ねると、打てば響くように『紅樓夢』という答えが返ってきた。秦可卿という作中人物は『紅樓夢』という作品の成立にひそむ謎を解くかなめの人物と考え、小説にも書いたし、論文でも論じた、という。紅学の専門家の周汝昌氏の評価をうけ、以来交流があるとのことだった。

現代文学ではもちろん魯迅は好きだし、郭沫若は自伝的作品がよい、という。何人かのほかの作家が話題になったあと、もっとも好きな作品として挙げられたのは、李劫人の『死水微瀾』だった。私もこの作者の作品は1950年代に作家出版社から出た『死水微瀾』と『大波』を所蔵しているが、いずれも未読の作品だった。必ずしも高い評価をうけている作品とは思っていなかったのが、意外な感じをうけながら、どういう点がよいか訊ねた。幼少年時代を成都で過ごしたから、この作品に描かれ

ている人々の生活、風俗などはすべてよく知っているもので、懐かしい感じがする。悠揚せまらぬストーリーの展開、人物を善玉、悪玉として描いていない点がよいと思うとのことだつた。あとで「請読《死水微瀾》」(『辺縁有光』前出)という文章を読んで、この作品が劉心武に大きな影響を与えたことを知った。それによると大学に入ったとき初めてこの作品を読み、蔡大嫂、羅歪嘴、俊子、劉三金という4人の人物が生きいきと描けているのに驚いたという。本人をさしおいて劉心武は老舎の影響をもっとも受けていると断言する人もいる。たしかに老舎は大好きな作家であるが、「自分がその影響を受けたとはっきり意識しているのは、やはり李劫人であり、この『死水微瀾』だと言うべきだろう」と述べている。また、その文章が読むとたいへん快いこと、フランスの文学、文化、とりわけユーゴーから栄養を摂取していること、四川人の色とりどりの市井生活の中にある俗文化を小説の中に溶けこませていて、読むと正統の麻婆豆腐を食べるようで、その素晴らしさは口では言えないほどであること、というような指摘も見られる。ところどころ原文と照らしあわせながら、河出書房新社の現代中国文学7に収められている竹内実氏の訳を読んでみたが、劉心武の推奨に違わぬ興味深い小説だった。吉川幸次郎氏が竹内氏の訳でこの作品を読んだあと「いやあ、中国にもあのように反道徳的な作家がいたのかね」(竹内実「吉川幸次郎先生を哭す」桑原武夫他編『吉川幸次郎』筑摩書房、昭和57年)と満足の声を漏らしたそうだが、蔡大嫂と羅歪嘴の傍若無人な不義密通をはじめ欲と道徳のはざままで生きる人物たちを生きいきと描いていておもしろい。北京のさまざまな階層の人々をあるがままに多彩に描き分けた『鐘鼓楼』と一脈通ずるものをもつ作品だと感じた。

現代の日本文学について——先にふれたように日本の現代とは明治維新以後という確認をしたあと、もっとも印象に残る作品として挙げられたのは、徳富蘆花の『黒潮』だった。いま日本では文庫などでは読めない作品であり、また私の読んでいないものだったので、意表をつかれた感じがした。あとでこの作品が豊子愷の訳で『不如帰』とあわせて一冊になって人民文学出版社から出ているのを知った。日本では蘆花の代表作としてよく知られている『不如帰』より社会小説とよばれる『黒潮』の方を劉心武は評価しているのである。あとで読んでみたところ、この作品は大長篇小説として構想されながら第一部だけの未完に終わったためか話の展開のテンポがゆったりとしすぎているという嫌いはあるが、明治の社会にのこる封建主義的要素と浅薄な欧化主義を人道主義的社会主義の立場から批判していて、なかなか読みごたえがある。ストーリーの展開のしかた、叙述・描写の克明な点などどこか『死水微瀾』と似通うところがあって、劉心武好みの作品と言えるだろう。ほかの作家で

は国木田独歩、樋口一葉も好きだと言う。漱石、鷗外はよいと思うし、川端康成にもよい作品があるとのことだった。小林多喜二の「蟹工船」、それに黒島伝治の名も挙がった。日本の現代文学を相当幅広く読んでいたことが窺えた。最近、大江健三郎の作品がかなり訳されているが、あまり感心しない翻訳もあるという。大江の作品では『ヒロシマ・ノート』がよいと思う、と語っていた。国際交流基金の方の話では大江氏との会見を希望していたが、大江氏のつごうがつかなかったとのことである。

#### 4 おわりに

私が劉心武の作品をかなり丹念に追っていたのは、『鐘鼓楼』、「五・一九長鏡頭」、「公共汽車詠嘆調」あたりまでで、この10年は小小説以外は散文や短篇、長篇の一部を拾い読みする程度ですませてきた。もう少し彼の作品をきちんと読んでいれば、もっと踏みこんだ質問もできたのではないかと悔やまれる。作家と会って話すには、こちらもそれなりの準備がなくては、という当然の自戒を噛みしめているしだいである。

劉心武と会ったちょうど一週間後の月曜日、電車のなかで『相对一笑』を読んでいたとき、となりに坐っていた30歳くらいの若い人から中国語で話しかけられた。「あなたの読んでいた本の著者は中国ではたいへん有名な作家ですよ」という。どれくらい有名なのかと聞くと、すこし前に大評判になった小説の作者と同じくらい有名だという。誰かなと思い、『廢都』の作者賈平凹か、と聞くと、そう、その人だ、という。日本に来て半年くらいになるというコンピューターの技術者だった。図らずも中国の若い人の間で劉心武が今もなお高い知名度をもっていることを知る機会となった。

1998年2月(わたなべ・はるお 國學院大學)

## 196名评论家、主编和作家投票 《作家报》评出去年十佳小说

本报讯 由作家报社组织的全国196名专家参加的1997年度十佳小说评选近日揭晓。赵德发的《继续与决绝》、毕淑敏的《红处方》、阿来的《尘埃落定》等10部长篇小说，刘恒的《贫嘴张大民的幸福生活》、阎连科的《年月日》、李国文的《垃圾的故事》等10部中篇小说以及铁凝的《秀色》、杨绛的《方五妹和她的“我老头子”》、严歌苓的《拉斯维加斯的谜语》等10部短篇小说共30部作品获奖。

参加投票的196名专家全部由各地文学评论家及文学期刊或出版社的主编和部分作家组成。此次评选先由各出版社及文学期刊杂志社推荐篇目，根据推荐意见，组委会列出广泛而详尽的候选篇目。投票采用了通讯投票的方式。组委会组织人力对选票进行了认真的统计，并严格按照得票多少选出了1997年度长中短篇小说各10部。组委会将所有原始选票、统计结果及有关资料交与济南市历城区公证处进行了法律公证，证明此次评选活动规则准确无误，程序符合规定，结果真实有效。

文艺报 1998.4.7